

読書指導の反省

— 中学校三年間を通して —

佐藤和子

はじめに

一 三年間の読書指導経過

1 一年

2 二年

3 三年

二 図書の利用状態―貸し出しカード分析―

1 どれだけ利用しているか

2 どんな本がよく読まれているか

3 どんな作家が好まれているか

三 生徒の反省

四 問題点

はじめに

り出すまでの三年間、国語科担任、クラス担任として受け持ってきた。

その三年間には、成功あり失敗あり、いろいろあったわけだが、その中で生徒たちの読書熱を保ってきたことには自信を持っていた。しかし、ほんやりと自己満足にひたっていたのでは発展も飛躍もないので、三年間のあゆみをふり返ってみることにした。

改めてふり返ってみると、ただ生徒の気持ちを読書に向けるように、小さな心づかいをしてきただけで、すこぶる消極的な読書指導だった。こうして反省の機会を持ってみて、はじめて問題点が見つめたように思う。

一 三年間の読書指導経過

さいわいなことに、私は大下学園で、併設中学一年から高校へ送

昭和三十四年四月から三十七年三月までの三年間であるが、記録をしていないので、主に記憶をたどって述べていくことにする。

1 一年

中学生になったとはいえ、一学期はまだ小学生気分が抜けず、マンガを盛んに読んでいた。困ったことだという意志表示はしたけれども処置に迷っているうちに、二学期はじめ、二クラス申しあわせで生徒の方でマンガや「平凡」の類を禁止した。生徒間できびしく監視してくれたので、私の方で口やかましく言うことはなかった。

十月に、道徳教育として読書生活を取り上げることになり、お説教にならずに効果のある方法はないものかとはじめて本気で考えた。気づいたことは「中一だからことばではだめだ、図書室にかんづめにしなくては。」ということだった。その一時間、はじめの十分をとって、読書の大切なこと、中一までに読んでほしい本、無理のない読書といったことを話し、あとは図書室に入れた。ここでは、どこにどんな本が置いてあるか覚えておくように、そしてどんどん借りるようにという注意をした。

これ以後貸し出しがふえたように思う。以来卒業するまで、読書熱がさめたと思われる時は、図書室で授業（グループ学習・参考書調べ）をしたり、自習時間があれば図書室でさせたりした。後で書架を見る生徒、借り出す生徒、雑誌などを広げて雑談する生徒——読書のふんい気を作り出していく上に効果があると思う。

平素のお説教はできるだけ控えたが、毎年学期はじめには、「今、本を読んでおかないと、もう読む時はない。」といった調子でおどかすことにしていた。本を読ませせることは、国語教育はもちろん情操教育の面でも必要である。

2 二年

四月、図書係が全校（中・高）の四月分読書調査を行なった結果、読書数では一位（一九二冊ひとり平均二・四冊）だった。一年の終わりから伸びていた読書量は、二年になって勢いを増した。国語の時間あるいはH・Rに教室にはいっていくと、机の上に本を置いたり広げたりしている生徒がザッと目にはいる。勉強のできない子が「良寛物語」を持ってきているのを見て、しめたと思う。読書のふんい気がクラスを包んできたようだ。

こんな時、生徒の本を手に取りつてみたり、ちょっとしたやりとりをして興味を示すことは、生徒には張り合いがあるようだ。もっと大事なことはほめることである。少しテコ入れしなくてはと思うときでもほめる方が効果がある。ほめておられなくなると、「図書室のお姉さんが、中二はよく本を読むと話しておられたのに、近ごろはどうしたのかしら。」といった言い方になってくる。女生徒ばかりであるから、ごとの言い方には神経を使う。特に反抗期にはいる二年生ではむずかしさを感じた。

新学期早々、やはり図書係の方で読書ノートのプリントを配られた。それを各自装丁させて六月ごろ提出させ感想を書いて返した。これはしつけの段階として、もっと早くしておくべきだった。「読書のしかた」「読書ノート」の単元は一年の中ごろ出てきたのであるが、読みものとして終わり、生徒の気持ちも動かし盛り上げるものではなかった。読書ノートも教科書の様式では程度が高いから生徒のくふうにまかせることにして自由提出にした。全くなまぬるい指導である。

週に一時間、この学年を教科書なしで教えておられたN先生が、五月に三回にわたって読書指導をされた。あらましを記すと次のよ

うである。

○全国の高校・中学でよく読まれる作家

○読書では無理をしないこと。自分に合ったものを。

○読んだ本とこれから読みたい本を書きつけていくこと。

○今読んでいる本の紹介をさせる。

○読後感想文を発表させる。

○最近読んだ本を全員に言わせてグループに分類（内容に目を向けさせる）。

なお、一年から三年まで、読解・鑑賞・言語・読書指導と、目標は変わっているが、壺井栄・島崎藤村・坪田譲治・浜田広介・芥川龍之介・「こどもに聞かせたいとっておきの話」・フアーブル・アンデルセン・千葉省三・奈街三郎・モーパッサン・「にんじん」・「にあんちゃん」・阿川弘之・チャベック・犬養道子・「パパとママの娘」の短篇・随筆などを扱われている。（詩歌・新聞雑誌などはここには記さない。）

おすすめしたい書物

一、アンケート集計

去る七月、中学には入って以来読んだ書物の中で印象的なものを二冊あげてもらいましたが、集計すると次のようになりました。

題数	書名	作者
9冊	宮本武藏	吉川英治
8	母の曲	ブローテイ
6	石坂洋次郎集	石坂洋次郎
4	次郎物語	下村湖人
4	ヘレン・ケラー	村岡花子
4	ジョン・エア	C・ブロンテ
3	ビルマの豎琴	竹山道雄
3	ストー夫人	村岡花子

33・9・5

3、三年

併設中学であるが、一年前から高校入試が課せられることになったので、三年になると勉強〜と受験勉強の方に向け声をかけた。そのせいか読書量は減ったが、読書の習慣は抜けなかったように思う。

このあたりで具体的な指導の必要を感じた。時たま短篇小説を読んでもやることはあったが、口べたな私は生徒の気持ちをそるような紹介やあらずじを話すことができない。というよりは、そこへもっていくまでの努力をしなかったというべきかもしれない。この時、計画したことは、生徒の側と私の側との二本立てで良書を紹介することである。七月にアンケートをとり九月に集計させたのが次のプリントである。このプリントの中で読んでいる本にしるしをつけさせた。

- 1 たけくらべ 樋口一葉
 1 風の中の子供 坪田讓治
 1 放浪記 林 芙美子

右のプリント以外の、中三から高一にかけて読んでほしい作品をプリントするつもりであったが、補習・模擬テスト・修学旅行等の忙しさに負けてズルズルになってしまった。二本立てにならなかつたことが悔まれる。

三年は質的転換期であるという。全体的に見れば、多読で、読書の中を広げていく時期であることに変わりはないが、一部の生徒にはたしかに質的变化のきざしが認められる。読書程度の高い生徒の貸し出しカードを見ると、成人向きの難解なものから少女小説・童話にいたるまで、手あたり次第に読みあさっていて、何かを求めていたことがわかる。

質的变化に沿う指導とか個人指導に気づかないで、図書室の本を読んでいればまちがいはないという安易な考え方で過ごすうちに、彼女たちは卒業してしまった。

二 図書の利用状態

——貸し出しカード分析——

生徒が読む本は、家にあるもの、自分で買ったもの、友人に借りたものもあるが、学校の図書室の本がいちばん多いと思う。さいわい二年と三年の時の貸し出しカードが保存されているので集計してみた。内容的にも量的にも限られてはいるが、読書の実態が自然そ

- 1 中学生の作文
 1 白鳥の湖
 1 火の鳥

のまゝの姿でつかみ出せると思う。

1、どれだけ利用しているか

四〇人と四一人編成の二クラス、合わせて八一名の学年である。

貸し出しカードは二・三年とも全員が作っている。

年間貸し出し数をみると、

二年——総数 一六五二冊 ひとり平均 二〇・四冊

三年——総数 一三二八冊 ひとり平均 一六冊

二年のときにいちばんよく利用している。これは一般的な傾向らしい。

それから、クラス差が七〇冊になったことがある。読書のふんい気で左右されることにはまさらながら驚いている。

貸し出し数の多い生徒をみると

二年——F七八、Y六九、O六一冊

三年——I八七、O七二、A六五冊

Iという生徒について考えてみると、一年間で八七冊、三度の休暇と五度の試験期を除くと二・三日に一冊くらいの割合で借りている。

年間一冊しか借りていない生徒は二年でひとり、三年で四人。成績のよし悪しには関係ないようだ。

2 どんな本がよく読まれているか。

⑦ 二年
貸し出し数の多いもの(頻数七以上)をあげてみる。

位順	作品名	貸出数
1	宮本武蔵	11
2	フランス南欧童話集	10
3	お伽草子 浜田広介集 こともに聞かせたい とっておきの話	9
6	小泉八雲集 夏目漱石集	8
9		
	次郎物語 山本有三集 夾竹桃の花咲けば 母のない子と子のない 母と アンデルセン童話集 母と子 中国童話集 ゆかいなホームー君 古都の乙女	7

「宮本武蔵」が非常な人気を呼び、講談社の全六巻であるが大体読みとおしているようである。

「浜田広介集」「こともに聞かせたいとっておきの話」は、N先生がよく扱われたものである。

一冊に集中しないため、右の表にはいっていないが、注目すべき特色として伝記・民話が多いことがあげられる。伝記は講談社の世界伝記全集全五十巻で、延べ九六冊読まれている。ストーリー夫人・ヘレンケラー・フランクリン・ナイチンゲール・親鸞・すぐれた女性たち、といったところが多い。

民話は未来社の全二十八巻で、購入された直後、ずいぶん読まれている(七六冊)。伝記は三年になっても数は減っているが読まれているのに対し、民話は三年になるとほとんど読まれていない。生徒は新しく購入した本にとびつく傾向がある。装丁の美しさを新しさも影響が大きい。装丁の美しい全集ものときは鬼に金棒である。

同和春秋社の「古典鑑賞」二十巻は、内容・装丁ともに秀れているため、二年三年通じて安定した読まれ方をしている。お伽草子・今昔物語・源氏物語・平家物語・雨月物語などがよく出ている。

④ 三年

8	次郎物語語 若草物語語 ○ボールとヴァルジニ	16	○夏の夜の夢 ○悲劇の王妃 ○赤毛のアン	11	
7	○幸福の家	18	○ハムレット・ベニスの商人 コンチキ号漂流記	10	
6	石坂洋次郎集	19	源氏物語	9	
5	○即興詩人	20	万葉秀歌		
4	○日向丘の少女・沼の家の娘	23			
2	○嵐が丘 ○母の曲	24			
1	○ジェーン・エア	33			
22		20		16	

16	ギリシャ・ローマ神話	14	宮本武蔵 悲しみよこんにちは	12	レ・ミゼラブル 桜の園・三人姉妹	11	○制服の処女
		12		14		15	
28							
		あしながおじさん	狭き門	夏目漱石集	今昔物語語	○緑の館	
7							

三年の初め、偕成社の少女世界文学全集(全三十二卷) 既刊十六卷) がはいり、爆発的人気を呼んだ。読書好きでない生徒もとびついていったようである。全くこれは予想以上だった。読書量は三年になって減っているのに、上位の貸し出し数は三倍になっている。いかに人気を呼んだかわかる。○印のついたものがその全集の中にあるものである。「赤毛のアン」「若草物語」は単行本でもよく読まれている。こんな全集が一年のころはいつていたら万事都合だったのに、と欲ばったことを考える。

「レ・ミゼラブル」「ギリシャ・ローマ神話」「万葉秀歌」「島崎藤村集」「夏目漱石集」は教科書の影響と思われる。志賀直哉・武者小路実篤・森鷗外は教科書にも出ているがあまり読まれていない。

童話は三年からは姿を消している。代わりに、旅行記・風土記・学習参考書など、知識欲を満たすものがふえている。

それから、高校生・成人向きの本にも手を伸ばしている。「ジャン・クリストフ」「風と共に去りぬ」「狭き門」「カラマイゾフの

兄弟」「罪と罰」「アンナ・カレーニナ」「従妹ベット」「息子と恋人」等々。

3 どんな作家が好まれているか

学年別は前記の表でわかるので、二年三年合わせて集計してみた。

順位	作家名	頻数
1	壺井栄	42
2	シェイクスピア	41
3	石坂洋次郎	36
4	モンゴメリ	34
5	C・プロンテ	33
6	吉川英治	28
7	夏目漱石	26
8	下村湖人	24
11	E・プロンテ	24
12	プロンテ	24
13	山本有三	23
	アンデルセン	20
	サン・ピエール	20

壺井栄は一年から三年までコンスタントに読まれている。下村湖人、夏目漱石も安定している。石坂洋次郎は三年になってから。吉川英治は二年のとき「宮本武藏」が人気をよんだが、三年でも衰えていない。この外「三国志」「私本太平記」なども加わってきている。

三 生徒の反省

彼女たちが高一の二学期を迎えた昨年の九月、出会った生徒に、中学時代の読書生活をふり返える文章を書いてもらった。高一の段階に立っての反省であるため少しきびしすぎる者もあるが、カード分析では出てこない一面がうかがえる。以下抜萃してみる。

「わたしが中学時代に読んだ本は、伝記の本が以外に多いのです。この伝記の中で、わたしに一番印象に残っている本といえば『ヘレン・ケラー』と『牧野富太郎』の伝記です。」「以上のような本（ヘレンケラー・牧野富太郎・コンチキ号漂流記・ゲーム島）を、わたしは好んで読みましたが、わたしにこんなに本を読むようにいってくれたのは、先生もあります。一人の親友のおかげなのです。」（M・I）

「中でも特によく覚えていっているのは、伝記の類で、『ストーリー夫人』『ヘレンケラー』だ」「小説では『十五少年漂流記』がおもしろかった。」（T・K）

「中学生時代の読書をふりかえって見ると言われたところで、私にはふりかえる余地はない。なぜなら、私には中学生時代の読書生

活という記憶が全然といていくらいからである。事実、読書をしなかった。だが、その数少ない記憶をたどると、一冊二冊は、まだ私の脳裏にくっきりと残っているものがある。それは、一つには吉川英治の『宮本武藏』。他のものは、はっきりと作品名を思い出すことはできないが、外国の見聞記を読みあさったように思う。

『宮本武藏』は、中学二年生のとき読んだと思う。この本は、当時私たちの学年ですごい人気であったものだ。最初図書館に一冊はあったのを、だれかが見つけて読み、次々と六冊も図書に入れてもらったものと思う。最後の一卷がなかなか入れてもらえなかったのだ。友人の一人は、毎日のように、まだ入れてもらえないのですかと聞きに逼った。競争して読み『今日は何ページ読んだよ。明日までにここまで読んでくるね。』とか『あそこは、こうなればいいのに。』『あれは憎いね。』などと話しているのを聞いているうちに、私も読んでみようかと思つた。だが、あの赤い表紙の厚さ三センチもある本だし、中の活字を見ると小さいし、厚さ三センチの本が六冊もあるのだ、このように長い小説を読んだことのない私は一瞬ためらったが、友だちが読めと進めるので思い切つて読むことにした。しかし、一たん読み出すと、なかなかやめられず、時間のたつのも忘れて読んだ。」「『宮本武藏』より他に思い出す作品は、『中南米を行く』『アジア大陸中近東を行く』『北米大陸を行く』などというN・H・Kの海外特別取材班の作成した一見風土記みたいなものや、『何でも見てやろう』などの一人の日本人が見た現在の外国の様子を書いたものがそれである。私はもともと地理が好きでこういうものには人一倍興味を感じた。だから新しいものが

はいってくと、まっ先にとびついて読んだ。」(S・O)

「今、中学時代に読んだ本を思うと、それだけの時間が惜しくなる。みんなが読むように一通り読んだのだから、と思っても良いが、しかし決して良い本を読んだとは思えない。石坂洋次郎に夢中になり、源氏鶏太を読み、そういう本を読んだ結果、日本の小説が外国のそれよりも劣って見えだす。もし夏目漱石、山本有三などを読んでいたら、もう少し日本文学に親しみを持てただろうと思う。しかし私が不思議に思うのは、外国には『赤毛のアン』『若草物語』などのりっぱな少女小説が多くあるのに、日本ではあまりそのような本がないようである。もしそんな本が日本に多くあれば、マンガを読む子が多少少なくなるのではないかと思う。もちろんマンガも大いにおもしろいけれども。

そのマンガから私が小説に興味を移したのは、Fさんと友だちになつた中一も終わりの頃である。最初の段階が『三銃士』『白馬の騎士』などの種類であつたように思う。中一の時は大して読まなかったが、中二になって大部多く読んだ。たぶんこの時が一番のんびりできた時だからだろう。読書カードをだれよりも早くいっぱいにしてと涙ぐましい努力をしたものだ。この時、『赤毛のアン』を読んだすっかりその本が好きになつた。それから『ジェーン・エア』『三国志』『コルネリの幸福』などが今印象に残っている。

中三になって何か背後から追いかけてられているような気がして落着かなかつた。読書にもあまり興味が持てなかつた。しかしこの三年生という時期は、私の最大に大胆な時で、おもしろくない授業の時は机の下で本を読んでいた。少しもわからない、理解するのに苦しむような、年令不相応な物を読んで悦に入っていた。人から文

学少女々と呼ばれて、疑問と反撥を感じた。」(Y・O)
この生徒が、さかのぼって四月二十四日、次のような手紙を寄こしている。

「先生、先生がこんな本は読んだ方が良いとお思になる本をたくさん上げて下さいませんか。毎月母から小遣いをもらっているのですが、今まで買った本を見ると情無くなるのです。その時はいいと思つて買った本も、今見まわすと少しも良い本が、いつ読んでもいいと思うような本があまりないのです。『こんな本にお金をかけるのではなかつた。』という後悔がいつもおこります。それと、文庫はどこがいちばんいいでしょうか。今まで角川文庫からよく送ってもらっていたのですが、何となく角川文庫は好きになれないのです。」

四 問題点

以上、まともならないまゝに書いてきたが、問題点として五つにまとめてみる。

1、しつければ早目にした方がよい。そのばあい、ことばによるより作業を課したり図書館に親しませること。図書館の蔵書・設備の充実が根本的問題である。

2、読書のふんい気を作ること。それができれば、あとは友人どうしの刺激で読書熱は盛り上がると思う。

3、個人指導を心がけること。何を読めばよいか、買うとすればどんな本がよいか、迷いは多いようである。

4、良書の具体的紹介が必要である。自信と情熱をもってすすめることができるように、相応の準備をすること。高校生よりは中学生のばあいの方が（低学年ほど）何を読ませたらよいか見当がつきにくい。手がかりになる本や辞典を利用すること。たとえば全国学校図書館協議会必読図書委員会編「何をどう読ませるか」など。

5、私のばあい、ふんい気は作ったが、何をどう読ませるか の指導にはなっていない。「どう読ませるか」は、読書指導として切り離されたものは実際にはできないと思う。教科書の文学教材によってしつかりきたえれば、どう読むべきかの姿勢は作られていくであろう。教室での文学教育が徹底しなければほんものの読書指導にはならないと言えるかもしれない。生徒の読書の実態がどうもふわふわして骨がないのも、私の文学教育のなまぬるさ、私自身の文学への対し方の貧しさが映っているように思う。

（前大下学園祇園中学校教諭）